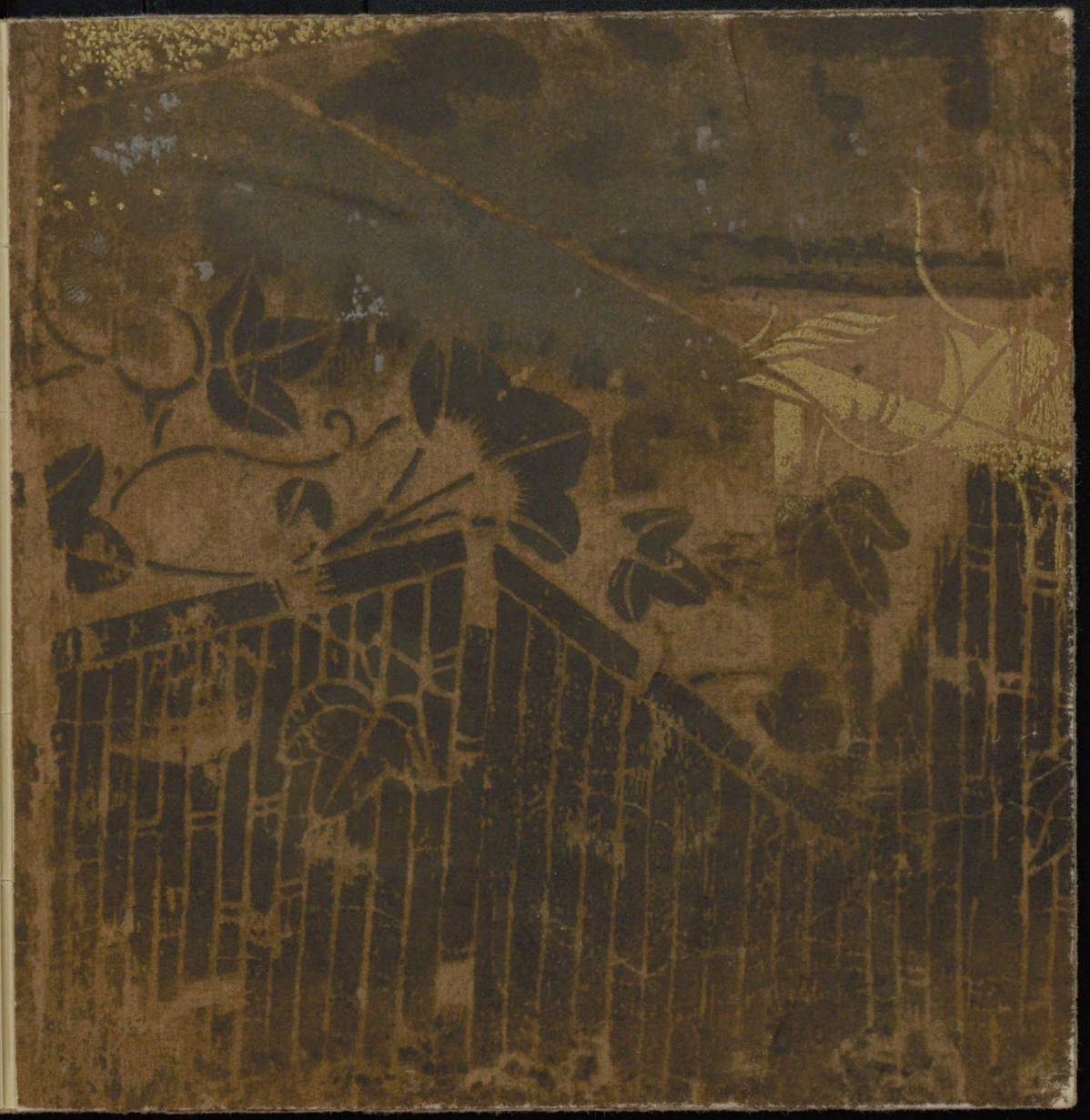
あ095
12

箱付



文二105

なと、、まるとゝふ日記といふ和
をゝむるをもて心みしをするに
ものゝ、は教のをてゝ
ものゝ、ともしの日のゝぬれ時よ
かとてゝ教ゝのゝ侍さてかゝ和
りかさにくゝある人ゝあゝこのゝと
扨いたゝせをてゝいのゝとゝ
みふをゝへけゝるゝをもてゝ
をちゝわいゝゝ毋ゝ乃ゝ(全

育徳財団
寄贈本
昭和 帝國圖書館藏

所へまふまかれこれきるしぬ
をくわすとしらんよくらへる
へくるしわるわるゆ思て弱
歩るよごくしたしのしうう
ちよ和ふくね

廿三日よいたみのくるへんてとたも
ちっよ顔をいるもちくるのときさ
はあふ地るれとむのくれもん
数かみしなくちたもあきていと

あやしくたほうのほとわよて
ひされあへる

廿三日やきのやすのわいよ人あわ
この人くすかをしすしもいも
ほっこもの多あるとるわれ
ろをはすきやうてむ海の
ちもむくちろかみろやあ
むくる人のんのたねとしていふ
ちとてんきするをんあるねえ
はちするるむきくるこれたもの
よ

よくてほしるるものをあるる
昔日禅師むすのもれむくく
ふいてをせわあるとある上下わら
まてもひしわれて一文字をこと
きぬものしかあるて十文字
よあみてうあるる
昔日かみのをもわらひるあ
みもつきあるわらわれいこと
日記ひとひよひとよこうくあるる

やうてあるくくわ
昔日ねかみのこるてあるる
しめしわ自ふまてるあ
かたくくわからうふこと あけて
いこくわやとうたあるを俗
らうとこと人もいひあわ
からうたこれるそかすやと
うふあるものかみのよめりくる
みやいてきみるあるむとこ
こうひきくわれぬるる

とゝんあわれたかへるさきのみ
ちゝめわらふ
さろふこの浪ぢをとをくゆきうて
わなゝきたれちるくる
とんゝのとあわれとけうあ
をるうんゝごくいひてきの
かゝいまのちんとゝとゝおまて今
のあるゝときのち手ちうく
ゝ見ひとゝとんよゝるるとゝて
いうたわ

廿日たほつよわうちゝをさて
こきいたかく教るうちゝ京て
うれわゝしをんちこくゝ
てゝわうせゝかこのゝん
のいうちいちきをゝれとなゝこ
ちいちに京へかつゝをんちふ
ちきのみちかちひるあるゝと
をゝうへすこのあむふよあふ
ゝとのかきていうせるうゝ
みわこゝと思ふものかるきえ

かくぬんのあれてなりわ
みあるはすゑ
あふものとわすれつるはふきん
いたるところかなるうわる
と伊ひくるあひるよかあさき
いふところよかみのたちうみと
人ふれさけるときてをい
きていろるおるてわるうき
とをいよかみのようのんの
なるこのきるんへうしん

あるやうよいたれものくかくわ
れるくいひてかのひとりのくちあこ
ちえんちるてこのうみへよて
よるひいるせるうう
たーと母ーんへとさるとあの
うちひれてこえわれきられ
ひいてあわれたいといくめて
ゆくんのよめわるる
はいをさせとうひときぬおこみ
ぬきんをきみるえるれ　乃

といふあひるよかたちわれのあくれ
きしてをのれさくらをくるは
たれてはやくいるじとてきるみ
ちぬれもきぬへとさわけは
毋のやちんとるこのたわるある
ひ〜たまるにきてからの
うちとも時よくつてきいよ
又ある人すくるれとかうか
ハをいかくうるるるやの
空のちやちらゆくこそ者よ
ぬとろいなることひうるる
とまるあちくのときさねちち
きれのちちひくんをはき
たわ
六日うとよわこきいてたは
みををふこのあひるをやと
のみのこ山くちれチねさけよ
きねもこきてあねるれわわ
ゆくこのみよ

元日たほみるとしわれも
きーあわたへてとうち白散さ
きくたつてきこのきうちんはー
あすうちわ
元日ねたちーとうもも白散を
あるこのよのはとてあるやうこと
はーたさめわれたはしよちき
るうさせてうみうはれてこのうは
なわぬいきーあらあもたうきも
ふーかうやうのはもちきうるも
きとめきをうはやうをーあはの
くちをのみうちよんへのくちを
ふーあはきーはやうあんや
ふうえみやこのみうたちやる
こへのつとのーりくへるこのふよ
しはからいこうはいうよう
とういひあへる
二日ねたこみるとよきれわ備
師ものさけをこせわ
三日たる一所也きーはるみの

れたまはしとおしむやあら
んとする
四日風あれていとうるさき
ほどなれどこれはなのか
うやうにおとしてくちにはれ
えてあるいさけわさせさい
ものなるはきわきやうなれと
まくるこちは
五日風波やうねれはれたる前
よあわいうるとよろしく

六日きのみのとと
七日よりわぬたるみなとよあわ
ふくあれはしるをおへとかひ
なしはつ浪のしろきのみそうる宿
かるほどよ人は家の池とをあ
つはわこえてあるふるわたを
めてかえのようみのとことおとも
おつひるこるひつけてをこせる
ひわはろふをたしらせる
うあわるのる

あさちのうすあれた水き
池よりみいるわれもわれり
いとかこしこのいけにいよ所
の名をわよきへいれたまうきて
くるとあのみるるをわこのる
むたのおもみれへるわはを
よくれたあきみをてあるこ
とをたはらつをうちうみを
さへたるのてるみてにへて
かくてこのあひるとたはわ
ふ　わりこをふせてきるへ
るのをとろやいたひいむむ
こよへうよほしとたよ心あ
てるわくわとかくいひてるみ
をりることうちへいひてよ
ゆくさきよをの白浪の隙わた
をくれてるむわれやさとと
とろめるいとたはをるへて
をてきるおよわてうは

いつあんこのうをこれ
あくしゃとぶとぶとかへて
せまた川へきんぎょをはなす
こんをのいろいろ和をのみくし
てよあんぬこのうこゝろさら
ほうとよいしてちゝあるんの
このわらはるこゝろよろ
おれうこのかつせんとしたん
きていたつきとうれなみ
つむやくよみ川へくやいて
とふまうとしてちゝあるん
をうちよさんとてとめるを
あるけぬるやかいよわ
ちゝいうよむふるいかを
なりてよこのわらはさするを
ちていすーしてとへているう
ゆくへとるも神のるみこ
みきのみこうぬけさちゝん
とんよあるかくはいこのうく

しられたるやあらんいとたさ
ちかはるはつとまてたなるま
せじかんをなきるを桜にへて
あくまあれいうまあしらるあ
らはやらしとてをうれぬめ
八日さえるとあわておかたる
とうちなおこよい月をうみな
うちこれをうちのきこ
の山のくるるいたすあるん
とふうるんたほのるき
うみへまてよまるかえるみ
をちさへていたすあるなを
をよみてまやいこのうを
思いてあるへのよりる
市る月のるるみれあるの行
いたるみをとうみよさある
九日のほとめてたほみるをあ
ふはのとまをとはしとてこさ

いてゐたこゝろをしるしたるものの
けらいのうちにてそこをまもる
くるゝ人〳〵ゐまつりなりしに藤原の
ときさね橘のすゑひろをせへれ
田地をさらるゝみてちもわて
をうしりいまこゝかこゝをも
くるこのへてゐ心さしあるゝ人〳〵なる
ゑこゝにおひものあちきんさしい
このうみくもたとらさるへてこれ
ゐいまもこきんなれてゐ

こゝをんをくらんとてゐこの人
ともをもきりかくてこきゐ
ゐよりうみのちとわるときゐる
人をとをくちわゐ冊の〳〵をん
ゐ取ちわゐきしまいゐと
あるへて冊ゐと冊ゐとあれと
かいたるしかれとこのうゐをれ
ゐたりとこゝてやみゐ
思やるんをうみをわるれも
ゐみてちゐれんしらすやあるん

かくて宇宙の松原をゆき教く
うのまつのかすいくうはくいくち
とせへるとしらんをとともよ
浪うちよせ枝ともよりるろい
かふれとんとてとるるたへす
てあるへのよめるうち
入れ世ん松のうれとすむしるい
ちよのとちとう四ふつちるる
とやこのうちところをとるるを
ふさらんかくあるをとてこきの
くはるるふもと海をみるくい東ふ
きてすむしんてとたすすて
てけのとかちとわのいるふうせを
枝のこもふくねをいとんちるも
はしてをんるくあるろこう
しらをはきあてはをのみるか
くかくれへあるこかちとはは
あちうらしてるとをはも
つるるのうとうふ
大ふのこうそはをくちく

わるすきまなくてきるくはたもつる
ふをたやゝまちるゝんきうとめ
やくゝんかたらやゞむへのうる
ぬきのれせるこたむちらをを
ゝてはきのわさをしてせも
きてうをのれるこすこれを
らすたほのれとかはこれをを
人のわゝをきこうみえある
れもんをすゝふきぬかゝて
ぬきくゝとまわるふるあす
たされはこゝとわうめはあ
あゝちよんぢあゝみゝ
のちのふきてはちわめ
十日ふえこあちんのとわよとき
りぬ
十一日あゝきよ舟をふゝこむ
んはをふんみれまねたん
うみのあやうてんすて月
をえてすゝはんをたちわ
ゝる

かるあひだよみもよあくて、
あらはれのこともしてひるよ
なわぬいさしたねとは所きね
わきわらはこの所の名をきて
たねといふ所をそのたねのやう
やあるといふ所ふたきわは
のことをれたへわらはのあわ
ゆるあわらはこの言をよめる
はとそちきく所たねを
どろとくよみやこへもつれ
とていつるをとをんなを
ゆくを京へもつれと思ふ
このうふよりとはあねとは
と思てへわすれすこのたねと
はいふ所とよまそのたいそ
又むしの人を思ひ伴われ
はすわすれふたはして
たこのかをつうとはくわ
しはは人のかをふねうる

かゝ教えてくれかいるつくるる
とよゝとを思いて人のゝめるふ
世中は思やれとこをよる
なかいこ二ちさるなりいちきれ
といひてちん
十二日あめ上るふむときれと
ちろあねのをくしあるすら
しはをまむろろよきね
十三日のあつてきよいさかるあめ
あるーはあつてやみぬぜれ
かれはあみちをさんとてあちあ
よろきこりよりなりあくうみを
たやれた
くもみも浪とろ人ゆるあるも
いつれうみとれてるくかる
とるうろよめるさこととうあ
まわるれた月なりろ
舟よのわたしめりよりも舟よ
れるねこくよきいぬきすれ
た

うみの波ばかりとうちてゐる
のあかけはことにてほやの
つのいすし　敷　あさひをう
けまもあらぬさきあさてん色
なる
十四日あさきすゆあめのふれて
ちりかゝるとはれりまゆきみ
せちえさうしものちれて
むすはやのちるかちもわきの
はわしわしなしるせるふ

ふねをとわかりてたちれぬ
かるとあちあわぬかちとわえ
ふしてきわよねさけちと
くふかちもわ寄きあるる
十五日きふあたきかゆよくち
たくあるいのあれたぬさ
ふちとよりふちあちへぬ
ちいふてるとをれたん海
をちめてうあるめのわは
のいる

をてたつねんみゆるて風
あみとく男よりちやあてん
いつこいなきものいつるよく
よたをつく

十六日風るみやねくあちれを
所よ河ゆとれやうこうみる
浪ちていたつみさきとよ
とろわてんとのみるんなぬ
風ちみごよ、やむくてあな

ちる人のこの浪ふこをたてよめる
うた
霜ふてきをぬ方ちといちねを
ちみのちるよたゆきろみ伝る
作て毋よれわ日よわ伝ふ
てよくつるあるりいてよちわ伝

十七日くもれるくちふくてあつ
きたくよいとれたしる伝れた
毋をいてこきゆくこのあい
よくものうへとうみのちも

たゝとくるちゝあわるる
むつもむつのなとこえはたえう
かへすみのうへの月をあねをを
ふうみのうちのちをとえいら
ゐむきさなきゐる色又ある
人のよめるうふ
みひちこの月のうへよとく舟の
さたなさえるかつちるる
こゝをきこてあるへの又よめる
かけ〳〵松浪のちこるはるこの
ちちきわるわれちわりき
かくいあるちる花やうやく春
ちあひちよゆくるかちちわら
くんきくちるえうよいてきね
ゐまきぬへてみあねへて
むといひて舟かるこのあひ雨
あわぬいとわひ
十八日ちたたち一所るあうう

あらくれた舟いさすこのよわ
ごかくみれともちくろれとも
いとたれしかはもくる
くれたるようとたほそ
をとこともいやわあんから
うるとよつて舟いさて
いつちるれたるんのよめる
伊勢のするうる年月を
いつともわぬゆきのみそふる
いうんつよせねんとも

又人のよめる

風よる波のいろはうくはな
春ちえらぬ花のみちにく
このうちをすてよろと
きて舟のをはしるたさる
月くんくるきんやわよめる
をつ浪を雪の花と吹風う
よせてんをちうへちる
このうちを人のちるといふ
を

ある人きゝあらためよめるの
うたよめるをきゝみそもある
ふるとし人みれえあてわ
らやうもうぬいとけ
しきあくてをすねとも
えねさかくわとえよみる
へかうるへをふくいか
かてはてのちすくいるし
九日えあらたまの毋うさん

苗きのみのやうなれて毋うさ
数みれへうれへふけく、
ふしくんとるくまえうて月の
へぬるかすをくふいくさうみそ
かとかうれたなひさうこま
しぬへいとわひいとねす
さうの月いうよくわ山の紫
ふくて海のちるもわいてくる
かやうるをえてやむあの

仲麿といふ人をまこと
しよわかつかきるはる
毋にのるべき所すてかくてん
むすのさもむくーわれわれそ
かしこのからうてわるもーる
あるやあかんたつのよの月
いるふてうあるるの月と
海よりいてるこれをみてう
仲まろのなーわくるえかる事
をたゝ沖世よわ沖ちよむこれ
いまえかみるしまの人もかや
うよわれわれみよるらあ
りかるしちあるはよいよむと
よめるうう
あなうふちぬわさんれを
かするみるけのやはて
いて月てとよめるる
かのくるべきるはうたて
えれとことのいとこえ

さ間をかきいてこのことは
ほうつる人よいたくもとなく
心をやきこゝろわびしいとおもふ
のほうよりなんめつらるきたこと
こゝろはこゝとおもふものるねを
月の歌をたゞなりことをきゝへ人意
人はんをおもふことやあん
はていまるものみを思やるてある
人のよめるうた

みやこゝて山のそこ不日ある
涼わいて涼こゝいれ

廿一日うの時はそわるを伊勢
みふ人へ申あねいたれをえん
はて春の海よ秋のこの空を
ちはるやうゝあわらたほ
ろまの頼よわてゝやあむ
ルトあゆよきゝ山きて
きゝくこのあひるよつくれん

ゆきてくるわらはあわうわう
ふをうう
ふほうくるの方をんやる
れわらはあわとしなんん
かつやとうようあくれるる
うくうようをきてこきくる
くんとしよ島いんのうつあり
はわをわるのいんのをと浪を
ふくうちるかちとわのいやう
くるき島のちとしるき浪を
よすとうしようのとちちふ
あくはもはしやうようき
こえるくのちとあんねん
どうむるるかくいんてゆくる
あをきみする人浪をんて
くるとわんめていかうくむる
せもとしるることなんよう
よ海のスかうるくんんかち

みしらけぬちくちやちく
海よあるおるわ〻
わ〻みの雪といろへの白浪と
いづれたかさわわたきつまさわ
かちとわいへ
廿二日よむへのとわとわとを、
はわをいつゆくたるよ山へは
どーこ、の所たわるをのわ〻
ヰーまわたたかさもくろあるこの
わ〻尺毋をこくまる山とゆく
とへゆをへ入てあやしきを
うくをろよめるろのうふ
こきてゆく毋のそへれ水の
山さへおくをまつたしろるわ
とういるたかさわ〻はの下
そたにつ〻〻〻小海あり
にていろゆきわるみの花
はかわある人のよめる
浪とのみをとつきけといみか

四きと花とよまるゝるが
芝三日してわてくるわぬこのわる
るかいろくのだろわあるといへ
ば花ばくさいのる
苗日きのふのだる一所也
苗日かたとわらめきつるせすと
いへと毋りさるかいろくをしく
といふをこゝにきゝ
苗日まことゝ毋あるかいろく
をとといつゝ花中さわ毋をい
つてこきくるみちとゝむけす
動所あわかちわーてぬさふ
たちるるぬさのいんーへち
いかたとわのやてゝるる
とはこのぬさのちるるてみふ
ねすみやこうーめゝへと
やてゝてるをきこてあるめの
わるはのである

わうみのちよのおもたいもけは
ぬさのおひのをやなぎもち
とちよめるこのほとりは風のよけ
まちかたちわいくちかこわてゐ
ねるおあけるとよろこよろのを
とをきてわはさたきもち
いたりとおもへるやあんいる
くよろこのもうるはちもの
こうめといふんのよるるる

おもしろのぬきゐるはんゆ毋も
ほてうちこうれもれ
とちていけのとよりている
七日ちき浪あらくれたる
ねろさひこれれかこくちけ
くなとこふちのかうてる日を
乃ちめたみやこをとちをい
ゆちるたのさをきてある
をんなのよあふ

日をくらすあり雷ちくしたる松を
みやこと思ふみちのくの長井
ある人のよめる
笠のたへぬるきわつてれば
かみびたいとたるくわくわ
むとしれやなつかたきー
てねぬ夜をすると雨とやすす
廿日　けさも
花日ねぶりてゆくうらを
ふてこきゆくはめのなくなる
をえていをかうしれたくなる
ねのちわくれたきこるひ日
るれて京のゑ日のといいそ
松もかをいをうみちるれい
かてーをんちのかきてる
せるう
たまるれくふて春かあたるく
うみまををよひろまーとの

とうりうみるてねのりのう
よてをいくあるんの
よめるう
くるあたわるまつかりの
わるきわるうるるれた
かくいひて、きゆくたんき
とろるよをせてこやいを
ゆをられをとのとゆとい
むりわむーとさといひるふ

とろるよ教みるる大この舟る
ほゆわるるをかいひるる
むーはあわ所のちくる
よろあなるあくれいひよ
めるう
年ころをすみ所のるる
きるる涙をあくれをうる
とりいるる
廿日雨風るのすかいるくよ

あさきせさこちやときこて夜中
さわよ舟をいこてあさの
みとをわろ夜ちちわれく西
えんこと人こすなとこをんな
かく弥仏をいのわてこのみとを
わろぬこちうのはさちろぬ
しあをいと所をすきてたふ
かとといと所をわろかくいろ
きて伊勢のちといとちえん
ていろぬしふ海よ浪よう
まものち弥仏のくみかう
あわるようわしふ舟よわわ
し日よかろあれちみろか
ああわこぬうよるわよしる
いまいたみのくうきぬれた
かいちくわちれ
二月一日あこのああつる
むはすちわよやみぬれは

いたみのあるとは所をいて、
こきゆくうみのうへきのよの、
どくよ風をみえすくるまき
乃まをそらをへてゆく所のを
くるく松のいろをあたくるの
るみをゆきのとくよかしのえん
さすをうよ五しきよるをひを
いろうらねこのあいふるふ
さこのうらをいよ所よわつをて
をきてゆくかくゆくあいいよあ
ふくのよめるうら
をぬくしけをこのうらなみ
たゝぬりをうみをかみを
よわつをさらむ
みるふきみのいをくこの月ふ
てをわぬるをふけきてくふ
しきよこすをてんもいよを
をてゆわるいる
をくをあつをすをのふき春のりを

よるのいきてわれをへよ
きくんのたまへやうちたた
ことすると云ふよいあて
あちきみのからくにねわい
してよとたつることをも
きこうたまへとてたゝめきて
やみぬよとつる物をみるれ
たとゝ云ぬ
二日あめ風やまずふることいよ
ゝつゝ邪仏をいのる
三日うみのうへきのあらる
れた舟いくさの風のまくこと
やすねたきこのあみこちへち
これをたゝよめちうる
をゝ月かちき初たたつち
なみのうまをぬぬちわ
かゝふくれぬ
四日かちやふ風くるのくき

さはりとなりてあれば
さしもわぬちねとなむねをする
なみのうちすこのうちとわたは
もえはまねからぬまりくり
あとをわのたまはえくさの
うるさきかいしるをたもち
かわさこむるのんをこれ
はるあねるんよ見ろ
よる浪ちよせんわこ
ひとわすれいたちひんむ
といへるひをせへすして舟
のんやわるよめる
辰のいろをせてらさを
こゑをうかみをたいん
どちんいへるせこのあるえむや
なさるくなぬてたまる
よもあるんを人いちむや
されもしこかほうわ
とよ

やうにあなかれる所よ
いをよることをあけきてする
をんなのよめるうた
てをりてさしやきもれ
いたみるろくしとさるこ
いろろへるる
立日けよかくしていつるのるる
よわをたのとわをよまま
ろめさるこまれれ

くふしまいたよめるうた
ゆけとれけやらいねたいものうも
ひたのうちるはきてのさつら
かくいたいくふほとよ毋く
こけりのよきよとさよちせた
かちとわるることさよいたく
み毋われはもるよるわあさ
いてこぬさきよつあてちやれ々
とよこのことはのうちのやうるち

かちのものとのうらのことはる
うぢとをうたるつるわたる
のやうるることりをもあら
きくんのあやくうめきこも
いむつるんとてかきいるせた
けよみうもーあわるるわ
きふ浪ちちとんつるね
ばよいのるーるーあれるみ
きたいまーかめむわのて
あちふ所あわ京のちるばくうこ
むのあるあるわるのよめる
うふ
伊のわくるがこをとふをあや
かもめさつふよちみをんゆん
とりてゆくあらるよいばと
ふとうんの松ちかたうて
えまへをかしみ和みよのわ
りをこきゆくあるんのるうう
いんてちををとかぬる伊の

ここは松ちやさきてるわれたへてるくわ
むりへひとのとくひとりかるなも
わすれねとよめる
敷みのえゝ毋さてらせる長草
さてるすわやとつゝてゆくく
とをんうたふへるわすれるもと
よえあてこれきんちーは
しやすめてみちこまるちゝよ
せもとをつかくいてるあ
くふあらるゆくわちくふふ
きてこはもりゝとわへちきと
ちきてちとくうちはぬ
あとかたのいたこの位吉の
明神たいの神ちちち
きわちたすんとくいまめ
きのさてぬさをとてたわた
へとふいわゝすしてぬは
をいまるかくいまれともち
凡やていやふきいやちよ

かせなみのあやふくれてかちちゃ
みいくぬさくくみんのいねは
ミふねくゆぬまめかるなうれ
しとおもいたなふへきわらふな
たつとしまふしたなるは
いのはむとてまれよくう
ふこあれこいとあるくみを
こいふるとてうみるもくあれ
くくちまされくうちいくく
うみくわくみたてのとちぬ
はくあるくのよ見るうう

ちくやるぬのくあくぬ
わみないれかつみくくれ
くく数みのにわすれくさきこの
いめまつるとふぬよくあくる
かーめくうつくかみるぬの
くくをくくくくくつれかちくれ
くくぬのみんなゆ
六日みなくくのくとよわいてくち
よはつきてかくーつくよいちみれ

みれば、ぼんれいたきれる
ひとつなあてくようとふ
こつれ、かのふるいのおち
のしまのおほいこみやとちあ
ぬとつをよんこれてふちちこ
よわかしらなとこりてかくうい
いてつとふせちるるよいる
あこきちはてみ毋きよる
いとなしのほっちる人のいれ
ひとあしるこれるちよ
ここちるやむふれきみりくめ
てふれ点ひしうつわみる
ほうえるすわるるとひる
七日ふ河しかる毋いわるて
こきのほるる河の水ひてあこ
わるふ毋のほるるいとうこ
かるあひるるふれまみの瘡
もとわこちくき人るてから
てうのとさるさてきりけり
かれともあはちうめのうて

めで、みやこ、ほとりにきやあん
からくてあやしきうらいねり
いらせわるのうらい
きときて、河のかわぢの水をあさを
舟とわたしをもるじんをみるれ
これやこれをすれなよめる
るへ〜ひをうるこゝろあ
はくいまひと
えと男子舟をもをすわるめる
みつのあさきをもわ
このうえみやこちくなわぬる
よろこぶへ教〜いるれ
ま〜あはちのこのうるおと
はりはきいくさこまものも
なとくやーるうちよるまち
わてはけや
八日をほすのかわるなつみて
ごわひのみきをいふほとわる
とまるこよひふるまみいの
やまひおこりていくるやむ

あるひとあさくるるものの
きくわよねてあつと教なし
ぞひそうるいよるわいたりて
をつちとやうのうやうのこと所
よあわくふせちみ教れえいな
ふ用

九日いとちさはあくねうう冊
なひきてのほたと河の水る
くれえねさわるみえねさるこの
あむうるわたとちのあれ
の所とよとうんあわよねいなを
とこへはをこるいつかくて冊ひ
きのほるよれきけの院と前
なみつゆくうの院むつと器
やりてみし小たはたしんかるる
所也とわつなるをうるえ松の
木ともあわるのよはるえむ
めえれさくわこうよひのいめ
いくくこれむつるうくきへ
ろ

所也故ふるみのゝたほんを
文に故あるたゝのるりの
中將のよのるとこゝにたくれ
けゝあるはさちのこゝろをけ
うゝまとしようゝよめるをん
ちりないふるあるをこゝ
るうゝよめわ

ちよへる松えあるといふ
こゝのさしさこゝかゝさわり
又あるゝのよめる

きみこゝにせをるやこの梅花
むしのゝうれるふるゝ
といひつゝゝやこのちゝたくを
ゝこむたゝのほるかくのちゝ
のるゝ京よくゝわ
みれ人ゝとるわきいふわ
しくすゝてうゝうあるをとを
あわあゝる人みれ毎のとゝ
ところゝよをいゝきたゝたを

月教えをうけしのこの
さかるきょうすて
なりわき有てかくるんのみを
あわもまてくるこるは
とひてうなきたるちもこれを
きていうあんからやうのともも
うさこのひとてあるもあら
さうとろうさこと思ことも
ようねはのわさとこのものの
とうとうとうとうとう

十日教えることあるのちす
十日あめいあ、かふるやあ
かくてさーのわるー東の方よ
山のようこはるるよ入て入ると
へそはるの家やいこれなき
てよろこびて入ようみて
まる山さきのくくやう
きとかるわちーこう相
寺のほとわるきは舟を
とめて

ごろくはりまるとあるこのてら
のきほとりに柳たちくあり
ある人このやちきのかけのけの
ちこようつれるなみてよめるうら
はいれ根よるあやをいあをやきの
かけのいとをるとそうんる
十二日山さきよあり
十三日なほ山さきよ
十四日あめふる京へと
をくる
十五日けふもあめきりあり舟
のりてけるまねよりの人の家
ようるこの人の家よりこるや
うてあるいこのあるし
のまきあるのよきをこるよ
うてたちゆいるかあり
と数家の人のいてあるけ
るすぬやかるあ
十六日けふのようけつく京へ

のぼるつゆよりんれたやはさき
れこれのたもまりのおは
ちのうさはすゝおりくわうわ
ひとのこゝろをそらぬとそよ
るかくて京へいくよしふける
よてひとあるすゝうかるる
しもあるまゝきわあるわたち
了四きてはよわたかるはうへ
たこゝろくあるこゝろくかつわを

数よるうちて京にていんを
おもつていろきしぬちとを
月いつあ桂て月のあきるそ
わるへのはくへめいさを
おけあすけるあねをを
ねらよかはすさわけわとして
ある人のよめるうう
公の月をたいるかそうは
そこるかくもかくさわたわ
又ある人のいつる

むかしのさうちゐつる様す
ゐをひてもわりぬるれ
ゐるへよめり
桂河わんもかよくねを
たすけよるさよちうえうる
京のうちきあわよ言すあ
ゐわうたほる花のあるて所も
みへ数京よりやうちうれ
家よいるあてかよいるり
月あのれいとくあわ数ゆ
ゐきこよりもとりこ
ゐくこほれやよれるいよ
あけもるへのんのあわる
ちうりるうきこうあきひ
とついのやうれたのうみて
あたうれるせさうはうもと
よものえいすえきせり
こよりることこわうの世も
のいきす

いとくるしくみゆれとんさこはせ
むとすはていけめいてくちまも
みつけるこのあわほうよ和さあ
りきいたせむとせのうちよ千
せやまきよくんかふくるく
あうるいこれひこうさ
しれるたほるのみもあれる
きくあくれとうんくよ
たもいこぬとふくなたい
ミしきうちこのいこうう
まけまんまこれもるとよ
かつねくうはかるきゆ
ちんさみもこうもてのこる
かるちよほうまきふ
つほこひちるかしれる
くいかるう
むれとかうぬめをわやと
こまるのあるこみくちまあ

ふにはあるまじとてあ
みくの松のちとせをみさふ
ごとくかちーきわれせをや
わかわかく、ちよーきこと
おほのれとえいくさすとまれ
かうまれとくやわこん

今まれし一ぬのうち
ぬくのてわたゞに
うまつのあるてみる
うゝるしねどそ等
ゐはあうあねあえん
まううるん
みしひとのまつのも
ごをまみまつは
ゞはえれまわれ
をゐしわ

わかれるとくちすし
よ、とゐはれど
あへなくあはれまれ
うつまれとくわてん

ゐを知も手跡と解必歌寓意
謂詐と単から他手跡多稱も筆
下溜奇性

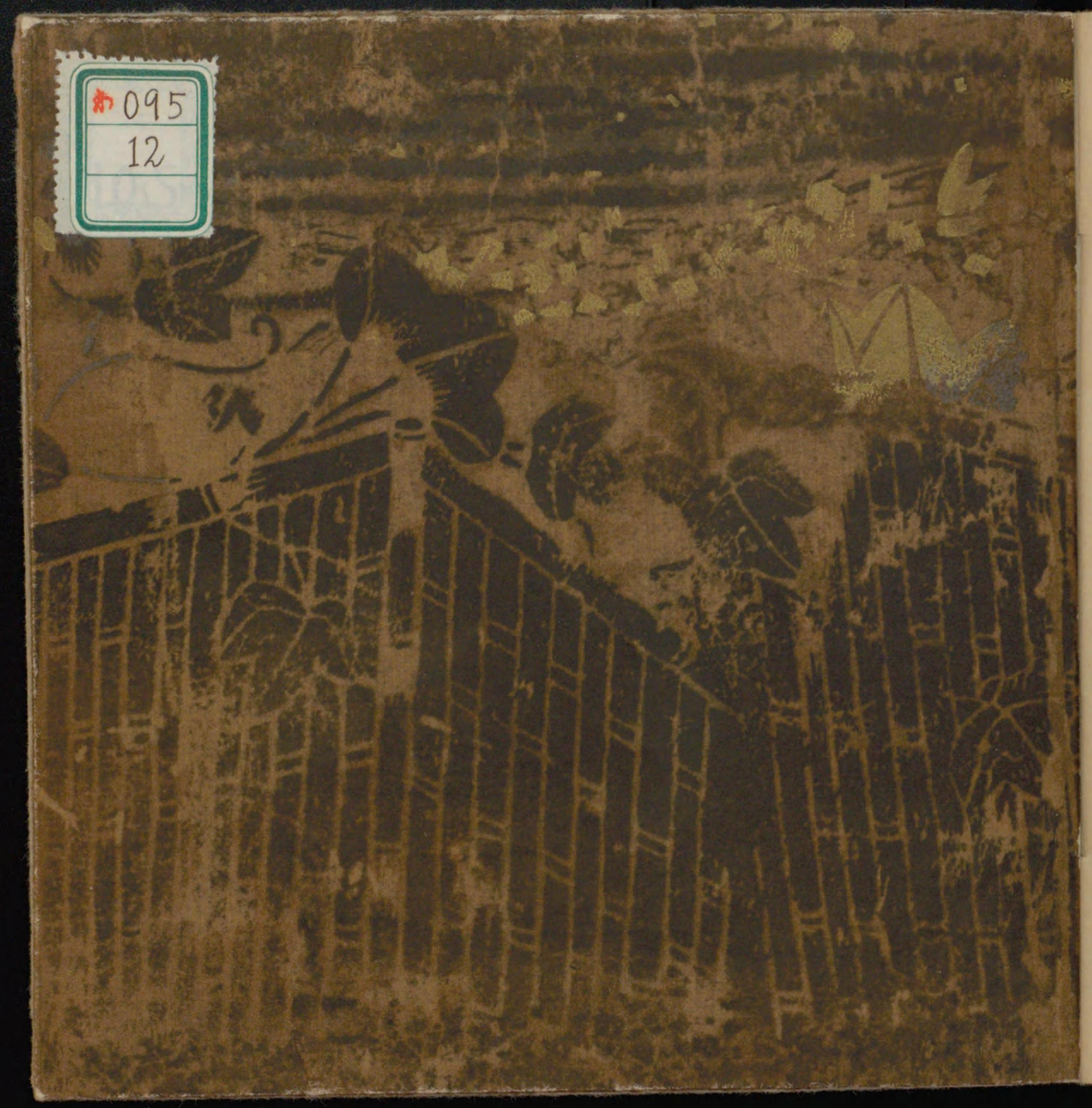
文暦二年乙未五月十三日 老病中
雖眼目不慮之外見紀氏自筆
本 蓮華王院宝蔵本
竹紙白紙不杉 高一尺二寸 三方行廣
一尺七寸 三方行紙也 廿六枚 三帖
表紙續白紙一枚 端部折返不立竹 三帖
有外題 主左日記 貫之筆
具左様 和字非別行 定行なし 書
部有顧字 字下 三字字 三字 後詞

不堪感興自書寫 昨今二年
終功 桑門明静

紀氏
近長八年 仕主左寺
在国或五年 或年 也
第本四 甲午五 乙未 年事
今年乙未 暦三百一年 紙不杉
撰 字 又 鮮明也
不讀得所 多 只仕本 書也

尊經閣叢刊土佐日記
原本侯爵前田家藏

あ095
12



春あけ
ぬはるも
こひつゝ
ぬれば